

パリ移民地区の再開発と「社会的混合」
—グット・ドール地区の形成と変容—

荒 又 美 陽

Urban Renovation and “*Mixité Sociale*” in a
Migrant Neighborhood: Formation and
Transformation of the Goutte d’Or of Paris

Miyo Aramata

Abstract

The Goutte d’Or of Paris, known as a migrant neighborhood, has been the object of urban renovation for about thirty years. It was urbanized in the first half of the 19th century, and developed as a workers’ residential area. After the Second World War, migrants from North Africa streamed into the neighborhood. The representation of the Goutte d’Or as an immigration area became established by the end of the 1970s. When an urban renovation project began in the early 1980s, many associations and architects moved to criticize it. The local administration accepted some criticism, but this does not mean that ethnic minorities were satisfied. Recently, the changes in the neighborhood have been accelerated by the politics of “*mixité sociale*,” and middle-class people have poured into the area. Over thirty years of projects, we can see how French society has sought a way to make the area “normal.”

Keywords: Paris, Migrant Neighborhood, Goutte d’Or, Urban Renovation,
Mixité Sociale

キーワード：パリ，移民地区，グット・ドール，再開発，社会的混合

1. はじめに—「社会的混合」をめぐる

近年のフランスの都市政策・住宅政策では、「社会的混合 (mixité sociale)」という表現がしばしば用いられる¹⁾。社会住宅の一つである HLM (適正家賃住宅) に貧困世帯が集中することが問題視されるなかで、多様な背景を持った人々が混ざり合って暮らす状態を理想とし、それを作り出そうという発想を持って使われるようになった (Houard 2009)。多様な人々がいる「状態」を意味する diversité とは異なり、mixité は物理的に変化を促すというコンテキストを持っている²⁾。たとえば、関連して 2000年に成立した SRU 法 (都市連帯再生法 Loi relative à la solidarité et au renouvellement urbains) では、その第55条で社会住宅を主住居の20%以上とすることを都市部の自治体に義務づけ、混ざり合っている状態を積極的に作り出そうとしている。

ところで HLM の貧困化は、実際には社会階層の問題だけではなかった。むしろマグレブやアフリカからの移民がそこに集中していることの婉曲表現であったといってもよい。フランスでは、一つの都市に、あるいは都市の一つの地区に彼らが集中することは、文化的・宗教的に他とは異なる「ゲットー」を形成することだとして、政治的・社会的な問題とされることが多い。「社会的混合」は、多様性を促すという理念のみならず、左派にとっては裕福な自治体にも移民や低所得層を受け入れさせること、右派にとってはゲットー化を批判しつつ中間層の居住地を増やすことを意味し、左派からも右派からも支持される傾向がある (寺尾 2004)。

しかし現在、社会的混合による多様化の拡大は必ずしも成功していない。SRU 法は、主住居の20%社会住宅を確保しようとししない自治体に罰金を支払わせることにしているが、社会住宅を受け入れる代わりに取って代わって罰金を支払うことを選ぶ自治体もある³⁾。他方で、今まで移民を多く受け入れてきた自治体は、中間層を積極的に受け入れるための方策を採るようになってきた。社会的混合は、実態的にはジェントリフィケーションを進める口実として機能している (ドンズロ 2012)。また、移民のために作られた住宅をより多様な人々のための住居に改変する政策も進められている (荒又 2011)。社会的混合という理念は、フランス社会において異質な存在と捉えられがちな移民たちの居場所を奪う状況を生み出し始めた。

本論は、パリのゲットー・ドール地区を対象にこの問題に迫っていく。ゲットー・ドール地区は、パリの一街区としてはフランスでもっともよく知られているところのひとつである (Prost 1998)。以下に述べるように、それはその「移民地区」としての性格に早くから注目が集まり、研究が進んだことによる。この地区では老朽化した住宅を再建するための再開発が30年近く続いているが、社会的混合を企図した近年の景観

的な変化は大きい。本論は、グット・ドール地区が移民の多い地区として認識されていく歴史的な経緯を示し、既存研究の成果も踏まえながら、近年の変化の意味するところについて考察する。

2. グット・ドール地区の建造環境と表象

グット・ドール地区は、パリ北部の18区、観光地として人気の高いモンマルトルの丘を東に下った一画である。貧しい移民が多いことで知られるパリの北の郊外に近接している。南はラ・シャペル大通り、西はバルベス大通り、北と東は線路で区切られている。地区の北側を特にシャトー・ルージュと呼び分けることも多い。行政区画としては、パリの20の区を四つずつに区分した80の「カルティエ」のなかで、71カルティエがここにあたり、「グット・ドール」という呼称を与えられている。71カルティエは全体で109ヘクタールであるが、北部はほぼ線路用地であるため、住宅や店舗に供される広さは33.7ヘクタールである（APUR 2005）。

「金のしずく」を意味する「グット・ドール Goutte d'Or」という地名は、この地で生産されていたワインに由来する。その農村がオスマンの都市改造の中でパリ市に編入されるのは1860年のことであるが、パリの人口増加と土地投機の中で、都市化は19世紀前半から始まった。とりわけ、1840年代の鉄道建設に伴い、隣接するラ・シャペル地区の鋳造所や機械工場の労働者がこの地区に多く住むようになった（Bacqué et Fijalkow 2006）。テクシエは、1853年に発表した『タブロー・ド・パリ』の中で、シャトー・ルージュ地区に民衆的なダンスホールがあったことを記述している（Texier 1853）。のちに有名になるサン・ベルナル教会は、1860年前後に建設された。

この地区の当時のイメージを伝えるのは、ゾラの『居酒屋』（1877）である。冒頭でジェルヴェーズがランチエの帰りを待つ家がすでにこの地区内にあることが、ラ・シャペル大通りなどの地名によって明示されている。洗濯場、「大きな家」、娘のナナの学校など、舞台の多くがグット・ドール地区内に設定されている（Cadilhac 1964）。それは当時からここが特に民衆的な地区と認識されていたことを示している。しかし20世紀前半までは、グット・ドール地区は特に都市計画的な注目を集めることはなかった。

第二次大戦後、労働力不足のなかで受け入れが始まったマグレブ移民がここに住み始めた。それは、1948年の家賃制限を逃れるために、アパートマンを部屋ごとに分割して貸し出したことが一因であったという（Bacqué et Fijalkow 2006）。劣化が始まった住居に住まざるを得ない移民の事情も大きかった（Prost 1998）。また「家具付きホテル（hôtel meublé）」と呼ばれる賃貸契約を結ばない居住施設が増えたこともそこ

に關与した (Bacqué et Fijalkow 2006)。単身移民労働者を受け入れる施設である「フォワイエ」も建設された。

1970年代までには、この地区と移民は強く結び付けて把握されるようになっていた。移民たちにとっても、最寄りの地下鉄駅である「バルベス」は、しばしばそれだけを頼りにパリにやってくる地名となった。移民を支援する活動も盛んになり、サルトルとフーコーがグット・ドールの移民労働者との連帯を訴え、ピラを配るなどの活動を行った写真も残っている。

作家のミシェル・トゥルニエは、1985年に移民の少年を主要登場人物とした『黄金のしずく (La Goutte d'Or)』を出版する。ベルベルの少年イドゥリスは、アルジェリアのオアシスから旅立つ時に、踊り子が身につけていた黄金のしずくを砂の中から見つける。その意味は、オランからマルセイユに向かう船の中で、金銀細工師の青年に教えられる。

「ブラ・アウレアだ」

「何だって？」

「ラテン語だ。〈ブラ・アウレア〉というのは〈黄金の泡〉という意味だ。金銀細工師ならだれでもこれを知っている。これはローマやエトルリアの記事で、サハラのいくつかの部族の間に今日まで伝わっているのだ。自由市民として生まれたローマの子供たちは、この〈黄金のしずく〉を環状の吊り金具で首から吊りして、彼らの人間としての条件の証としていた」(トゥルニエ 1996, pp.115 - 116)

イドゥリスはマルセイユに着くなりこのペンダントを奪われる。その後、列車に乗ってパリのグット・ドール地区に到着するのである。この地区に住んでいるのが権利を奪われた移民であるというイメージが作品に影響を与えたことは疑いない⁴⁾。グット・ドールという地名は小説の中では用いられず、より詳細な通りの名前などから示される形になっており、それでもタイトルの意味が了解されることが前提となっていることから、地区と移民の結びつきの強さがうかがわれる。読んでから理解した読者も含めるならば、グット・ドール地区の表象はパリ市内にとどまらず広く伝わっていったことになる。

他方、このように把握されるようになった移民地区は、常に共感と支援の対象となるわけではなかった。売春やドラッグの売買、麻薬中毒が地区で見られることは、地区の移民への批判にもつながった。そして同じころ、この地区の「衛生性」を問題視

した都市計画事業が開始されることになる。

3. 再開発の開始と地区をめぐる攻防

グット・ドール地区の再開発は、1977年から検討されていた（Bacqué et Fijalkow 2006）。1983年、パリ市はグット・ドール地区の南部において再開発を行うことを決め、調査を始めた。日本の開発許可にあたる「公共の利益の宣言」がなされたのは1985年6月である。再開発の理由として挙げられていたのは衛生状態であり、衛生的でない住居が全体の8割を超えていると説明されていた（Office public d'habitation de la Ville de Paris 1988）。しかし、地区が「ゲッター」となっているという報告も併せて行われており（Bacqué et Fijalkow 2006）、衛生状態が介入の口実であることは明らかであった。それは、この開発対象地区の中心に警察署が建設されたことから見て取れる。

市民からはすぐに反対運動が起きた。1970年代から、カトリック系の団体を中心に、地区には多数の支援団体が入っていた（Bacqué 2006）。彼らは住居の問題を熟知していたが、多数の建造物を破壊し、住民に居場所を失わせる計画には強く反発した。そこで動員されたのは、この地区は「ゲッター」ではなく、「村」なのだという見方であった（Fijalkow 2007）。「村」という概念は、1930年代のモンマルトルを皮切りに、様々な地区で肯定的に利用されており、安定的で家族的な共同体という理想化されたイメージを持っている。つまり、移民の流動的で闇の存在というイメージをこれに置き換えることにより、地区のネガティブなイメージを転換しようとしたのである。

多くの建造物を建て替える計画には、建築家のグループからも強い反発があった。1980年代のパリでは、スクラップ・アンド・ビルド型の都市計画事業は時代遅れとみられていた。都市の歴史性を浮かび上がらせ、それに沿う形での都市計画を行うことが必要と考えられた。プレトマンとキュロが編者となり、歴史家ルイ・シュヴァリエの導入文をもって1988年に出版された『グット・ドールーパリのフォーブール（場末）』では、地区の建造環境が区画や地形、古写真や絵ハガキなど、様々な観点から再検討された。中でも重視されたのはゾラの『居酒屋』である。作品自体はもちろん、ゾラがこの地区を歩いて残したメモを参照し、現実の都市空間との対照が子細に検討された。行政の計画に対する90ページにわたる改善案も記載されている。

このような市民の反発を行政は無視できなくなった。行政はサン・ブリュノ・センター（Salle Saint-Bruno）を発足させ、住民や市民団体の情報拠点とした。しかしバケは、それさえも社会批判を部分的に取り入れることによって反発を抑えたのだと批



写真1 居酒屋広場（2012年9月撮影）



写真2 グット・ドール地区南部の改築された社会住宅（2012年9月撮影）



写真3 ブティックが並ぶギャルド通り（2008年8月撮影）



写真4 文化センターと図書館（2008年8月撮影）



写真5 ハラルの表示をした肉屋、アフリカ系の布地店などが並ぶ（2012年9月撮影）

判する (Bacqué 2006)。実際のところ、これらの市民団体の主要メンバーにはエスニック・マイノリティは加わっておらず、彼らの意見が代弁されているかどうかを行政が確認することはなかった。行政と市民団体の協同により、事業への反発は次第に鈍くなっていった。

都市計画の方針も、部分的に変更された。もはや地区の性格を全面的に転換させるのではなく、フォーブルという性格 (faubourien という形容詞をしばしば用いている)、つまり都市の周辺部に広がる民衆的な街区という状況を維持する計画を行うようになったのである。ゾラの『居酒屋』は、この地区を記述するためには欠かせない要素となった。近年の地区の紹介には、冒頭に必ずと言っていいほどこの作品への言及がある (cf. Chadych et Leborgne 1996, Hazan 2002, パンソン&パンソン=シャルロ 2006)。

しかし、都市計画の変更が住民の利益のためであったかといえば、そうは言い難い。80年代にはじまる事業で作られた広場の一つには「居酒屋広場」という名前がついている。それは作品の中でジェルヴェーズとヴィルジニがつかみ合いのけんかをする洗濯場が設定された場所であるが、現在は建物がなればかりかベンチもなく、ところどころに植木が置かれて、人々が集まりにくい広場となっている (写真1)。建設された社会住宅は、「不衛生ではなくなったが、恒久的な価値を持たないので、住民が愛着を持ってない」⁵⁾という (写真2)。

また、地区のイメージを変えるために、通りの一つは若手のデザイナーを受け入れるブティック街となった (写真3)。文化センターも建設され、地区の一部は刷新されたともいえる (写真4)。しかし、それらによって移民地区としての性格がなくなることはなかった。グット・ドール地区の南部は、現在も国際電話ボックスやクスクスのレストラン、あるいはハラールであることを表示した肉屋が並ぶ通りに特徴づけられ、移民たちの生活の場となっている (写真5)。

4. 90年代のグット・ドール地区を取り巻く状況

80年代の都市計画を通じて地区の歴史性が掘り起こされる一方で、生活者としての移民の研究も進んだ。その最大の成果は、1990年にトゥーボンとメサマを編者として出版された『移民による中心性—グット・ドール地区』と題した二巻にわたる共同研究である (Toubon et Messamah 1990a)。彼らは、歴史学的、社会学的、人類学的手法を駆使し、歴史資料や統計、新聞記事や住民の語りの分析を通じて、地区が歴史的に移民を中心にして形成されてきたこと、そしてここがマグレブに限らず様々な移民の生活の中心となっていることを詳細に明らかにした。

しかし、地区と移民への偏見は消えることはなかった。1991年6月19日オルレアンで、当時のジャック・シラクパリ市長は、その後の人種差別的発言の基準ともなる講演をした。「外国人を拒否するというのではない。ただ、起こっているのは、それが今日多すぎるといことだ。問題は外国人ではなく、オーヴァードーズ（主に麻薬の過剰摂取を示す語）である。」「1万5千フランぐらいの収入で妻とグット・ドールに住む労働者は、自分の住むHLMの同じ階に、一人の父親と3-4人の配偶者と20人もの子供が詰め込まれた、5万フラン近い社会給付を、当然、働かずにもらっている家族を見ている。」「騒音と匂いを付け加えるなら、同じ階のフランス人労働者は相当に頭にきている」（1991年6月21日『ル・モンド』記事より引用。）クレソン首相をはじめ、左派は人種差別的であると一斉に批判したが、右派には支持する声もあり、それがグット・ドールの移民に対するフランス社会の一つの見方であることは間違いなかった。

1991年の映画『最悪だ！（La Totale !）』には、この地区が用いられている。政府の諜報部員である登場人物がテロリストに飛行機などで連れまわされ、アラブ世界を思わせる場所に監禁されるが、逃げ出していくとすぐにパリの街に出る。彼はすぐにそこが「バルベスだ」と「気づく」のだが、実際の建造環境から見れば、パリの町の一角がアラブ都市になっているわけではない。コメディ映画ではあるが、グット・ドールには移民ではないフランス人には入り込めない世界があるという認識の広がりが出ていとみてよいだろう。

この間にも、80年代からのグット・ドールの都市計画事業は続いていた。市議会に提出された議案を見ていくと、1991年から93年にかけて、HLMの4分の1程度の住宅が警察官舎に割り当てられている⁶⁾。ここには地区への監視を強めようとする行政のはっきりとした意思を見て取れる。またグット・ドールはZUS（都市問題区域）⁷⁾に指定され、集中的な都市政策の対象ともなった。

他方、地区の住民構成には変化が起きていた。1970年代に中心的であったマグレブ系の移民は1980年前後から徐々に減り、代わりにサハラ以南のアフリカからの移民（以下「アフリカ系の移民」とする）が増えてきたのである（Toubon et Messamah 1990b, pp. 44-45）。アフリカ系の移民は80年代から徐々に増えていったが、住居を確保することが難しく、他の住居に移るマグレブ系移民から譲り受ける形でグット・ドールに住み始めた（荒又 2011）。

1974年に単純労働移民の受け入れを停止したフランスでは、新規の移民は非正規滞在であることも多かった。そのような状況のなかで、彼らが滞在の正規化を求める運動がグット・ドール地区で起きた。1996年6月、自らをサン・パピエ（書類を持たな

い者)と称する非正規滞在の移民たちが、サン・ベルナール教会を占拠した。彼らは2か月の間教会内に立てこもった。集まっていた人々は必ずしも地区の住民ばかりではなかったが、この運動は主にアフリカ系の移民が非常に脆弱な状況におかれていることを周辺地区のイメージとともに世界に伝えることになった。

移民にとってのグット・ドール地区の意味は、時代やエスニック・グループによっても異なっている。地区の外の住民にとっては、グット・ドールは買い物のために訪れる地となっている。とりわけアフリカ系の食材に関しては、パリ近郊を含めた「市場」⁸⁾として機能している。また、バルベス大通りを挟んで地区の西向かいに広がる百貨店タチ Tati は、洋服から下着、食器や日用品、近年では貴金属やウェディング・ドレスまで極めて安価な商品を集めており、遠方からも買い物客を集めている (Lallement 2005) (写真6)⁹⁾。



写真6 バルベス駅の百貨店「タチ」(2012年9月撮影)

住民にとっては、当然ながら、グット・ドールは日々の生活の場である。ムスリムが多いこの地区の移民にとって一番の問題は、祈りの場がないことであった。地区にフォワイエがあったころは、礼拝室も備えられており、問題は少なかったが¹⁰⁾、80年代の都市計画事業によってフォワイエが解体され、通常の社会住宅に改築されると、その場は失われた¹¹⁾。当初、地下室などで行われていた金曜日の礼拝は、次第にスペースが足りなくなり、ポロンソー通りとミラ通りの二か所にあるモスク周辺の道路を信者が埋め尽くすようになった。それは、イスラムのヨーロッパにおける「可視化」であるとされ、世界的にもその光景が報じられた¹²⁾。実際には金曜日の一時間ほどのことであったが、フランス社会に与えた衝撃は非常に大きなものとなり、イスラムと地区を結びつける認識が普及した。

5. 2000年代の変化—シャトー・ルージュ地区の社会的混合

グット・ドール地区南部の事業は1990年代にほぼ終息し、1993年からは北部シャトー・ルージュ地区の調査が始まった。1997年には公共の利益の宣言がなされたものの、本格的な事業が始まるのは2000年代になってからである。

2000年の時点で、グット・ドール全体で見れば、すでに15年に及ぶ再開発が行われ

ていたのだが、バルテレミらの研究によれば、1997年まではある程度確認できるものの、パリの他の地区と比した不動産価格への影響はそれほどはっきりしていないという (Barthélémy et al. 2007)。多様なアクターが関わったため、相殺されているとの見解もある (Bacqué et Fijalkow 2006)。

しかし、移民の受け入れの地としてのグット・ドールの性格は、少し変化している可能性がある。1990年と99年の住民の居住地データを見ると (表1)、外国から地区に流入した比率は、パリ平均に比べれば確かに高めである。しかしむしろ、グット・ドール地区において同じ家に住み続けている外国人が、フランス人に比べて高い比率であることには注意が必要である。この地区に住み始めた移民はより条件の良い住宅に移ることができなくなっていることが予測できるからである。滞在許可証の有無がそこに関与していることも想像しうる。

またパリ市内からグット・ドールに移動した外国人の率もフランス人に比して高く、パリ市内において移民が他の地区に住むことが次第に困難になっていることも考えられる。それは、パリ全体に移民を受け入れる場所がなくなってきたことを意味する。実際のところ、不動産価格の上昇の中で、貧しい移民が住める住宅はパリ全体で急速に減少している (荒又 2009a)。

現在のグット・ドール地区において、移民が住む住宅として特徴的なのは、家具付きホテルである。2007年1月のデータで、パリ市内の家具付きホテル648軒のうち、18区では126軒とその20%近くが営業している (荒又 2009a)。それは、滞在許可証などを持たなくとも住むことができる住宅であり、地区の移民たちが置かれた状況の厳しさがうかがわれるものである。

その中で2001年、ベルトラン・ドラノエが市長に選ばれ、パリ市政は初めて左派と

表1 居住地別にみる人口移動 (1990—1999年)

(人、%)

カルティエ名	同じ家			パリ市内			外国	(人、%)		
	うちフランス人	うち外国人		うちフランス人	うち外国人			うちフランス人	うち外国人	
グランド・キャリエール	29,311	88.7	11.3	48,873	87.7	12.3	3,667	38.5	61.5	
クリニャンクール	27,176	85.1	14.9	44,524	84.1	15.9	4,771	36.1	63.9	
グット・ドール	11,756	75.1	24.9	20,427	72.5	27.5	2,412	31.1	68.9	
ラ・シャペル	10,091	75.5	24.5	17,113	73.7	26.3	1,844	33.7	66.3	
18区計	78,334	83.7	16.3	130,937	82.3	17.7	12,694	35.5	64.5	
パリ	920,280	88.0	12.0	1,494,371	87.4	12.6	139,709	36.5	63.5	

出典：INSEE 2001より筆者作成

※グランド・キャリエールからラ・シャペルまでは、パリの行政区画であるカルティエの呼称。

※「同じ家」は90年と99年に同じ家に住んでいる、「パリ市内」は90年に市内のどこかにいて99年にそれぞれの地区に住んでいる、「外国」は外国からそれぞれの地区に移動した人数と比率を表す。

なった。18区長も左派であることから、地区の都市計画事業はむしろ急速に進められている。2002年、パリ市はシャトー・ルージュ地区の「不適格住宅」を解消するための事業を開始した（荒又 2009b）。それは、衛生状態が悪い、不法占拠が行われているなどの条件によって行政が選んだ建物である。建造物は基本的に修復する方針で進められているが、シャトー・ルージュ地区では建造物の状態が悪いことを理由に80%以上が取り壊され、新しい住宅が建設されている。

その新しい建造物は、以前の事業とは異なり、全体が社会住宅となっているわけではない。地区全体では400の社会住宅を建設するという計画だが、建物全体を社会住宅のみにするのではなく、全体の何軒かを社会住宅にし、他の社会層を同じ建物に住まわせようとしている。そうすることで、「社会的混合」を目指すという方針がとられているのである。

移民地区としての表象が定着したグット・ドール地区に、どのような社会層が入ってくるのだろうか。しばしば指摘されるのは、ボボ（Bobos）と呼ばれる人々の存在である（cf. Associations Coordination Toxicomanies 2006）。ボボとは、Bourgeois-Böhème の略であり、物質的には豊かな生活を享受しながら、心情的には左派であり、民衆的な生活を好む比較的若い人々に対するネガティブな表現である。パリのもう一つの移民地区、ベルヴィルにおいてより以前から指摘されていたが、地区に大きな変化を促すことが多い。

実際、近年のグット・ドール・シャトー・ルージュ地区の変化は非常に大きい。新しい建造物の質が南部の地区に比して高いこともあり¹³⁾、住民の社会層に変化が起きていることを見て取れる。例えば、地区には今まで全く見られなかった花屋や高級靴店、有機食品店やワインショップなどが次々に現れている（写真7）。アルコールを置くカフェ・バーも増えている。それは、移民の生活の場としての地区の性格をすぐに失わせるものではないが、地区全体の印象を確実に変化させるものである。

社会的混合に関しては、ロネイがグット・ドールを事例に研究報告をしている（Launay 2010）。行政は「キーアクター」となる人々を抽出し、積極的な社会的混合を進めようとしているという。それは、今まで交流のなかった社会層を



写真7 グット・ドール地区北部の新しい建造物（2012年9月撮影）

つなげる役割が期待される人々である。たとえば、高級住宅街では「社会住宅に住むのは看護師や教師であって、一夫多妻の黒人ではない」と納得させる役割を負う人々であり、移民地区では文化的職業についている人々である。しかし移民地区では、キーマンとなる人々であっても子供の就学になると地域の学校を避け、私立校に入れる傾向が出る。そして、行政の期待は「人質にとられている」ような感覚も彼らに与えてしまうという。社会的混合が地区の住民の交流や相互理解を進めるものであるという状況は、今のところあまり見えてこない。

グット・ドール地区における移民の支援活動は現在も多い。行政は2006年にイスラム文化協会を開設し、偏見を解く試みを続けている。2008年には主に高齢の移民の交流を図る「カフェ・ソシアル」が開店し、確実に彼らの居場所となっている。しかし、物理的な変化が進められている地区において、このような活動がグット・ドール地区の移民の生活を保護するものとなるかは未知数である。移民がグット・ドール地区以外の住居の選択肢を失っていく状況にあるなら、この地区の変化は社会的に脆弱な人々から居場所を失わせていくことにつながる。

すでに述べたように、80年代にはじまる事業においても、ブティックや文化施設によって地区のイメージを変化させる試みはあった。しかし、近年の社会的混合は、それをより「効果的」に進めたように見える。表2に示した通り、地区の外国人の率は1999年から2008年までに大きく変化していない。しかし、「管理職層」という最も高学歴・高収入の社会職業区分に属する人々が確実に増えていることは確認できる。近年の景観の変化の大きさを見るなら、現在はより高い率となっていることが予測できる。すでに述べたように、パリ全体の家賃が高騰している今、それは都市計画事業の直接的な影響とは言い難い。しかし、社会的混合に力を入れ、移民集住地区を変化させようとする現在の方針からは、結局のところ、フランス社会は移民との共生を図るよりは、グット・ドールの特性を緩和し、いわば「普通の」地区にしようとしていることが見えてくる。

表2 グット・ドール地区住民の変化

年	(人, %)			
	人口	外国人率	管理職率	労働者率
1999	28,524	28.6	8.2	13.0
2008	30,473	28.7	14.0	10.5

※パリ71カルティエのデータによる。

※1999年のデータはINSEE2001, 2008年はINSEE2011による。

6. おわりに一残された課題に関して

本論は、先行研究を踏まえながら、グット・ドールの建造環境と表象の形成に関する歴史的な経緯をたどってきた。現在の地区の大きな変化については更なる検証を必要とするが、移民地区における再開発によってフランス社会が求めているものは明らかになってきたのではないか。80年代の右派政権によるスクラップ・アンド・ビルド型の再開発、その後のフォーブールの再開発、2000年代の左派政権による社会的混合型の再開発のいずれも、その手法や参照モデルは変化しているものの、地区がエスニック・グループによって特徴づけられている状況を解消しようとする意味では一致している。

住民一人一人の単位では、劣化の進む建造物を再建・修復することに異論はないだろう。しかしその過程においては、非正規滞在であるなど、最も脆弱な立場の人々から居場所を失っていく。結果としてグット・ドール地区が移民地区でなくなった時、パリに「社会的混合」の地が残るのかは疑問である。

最後に、本論で取り上げることができなかった近年の重要な変化について触れておきたい。それは、路上での祈りに関することである。2011年9月、パリ警察は地区のモスクとの合意によりこれを禁止し、ネイ大通りにある旧兵舎を金曜日の礼拝の場として提供することを決めた。またパリ市は、グット・ドール地区の二か所にイスラム文化協会の建物を作り、そのそれぞれについて一つの階を民間資金によるモスクにすることを決めた。やはり路上で祈っていた人々を収容するためである。これらは、住民、ムスリム移民に大きな生活上の変化をもたらすものである。それが何を意味するのかについては、紙幅の関係から別稿に譲ることにした。

本論は、科学研究費補助金課題番号23242052による研究成果の一部である。

注

- 1) 英語圏にも social mix という表現があり、関連した政策も存在している。Kubo et al. (2010) は成田ニュータウンを対象に高齢化問題と関連させたソーシャル・ミックスについて考察している。英語とフランス語において対象としている考え方の類似点と相違点については、詳細な検討を必要とするため今後の課題としたい。
- 2) ユネスコの人種差別都市連合に携わったフランスの担当官は、mixité というフランス語から最初に連想されるのは男性と女性が混ざり合っている状態、たとえば共学の学校であり、diversité と比較すると作り上げていくものということが含まれていると話している。(2009年9月インタビュー)

- 3) 2012年9月5日, 「国土と住宅の平等」大臣であるセシル・デュフロは, この罰則を強化する法案を提出した。罰金を支払っている自治体は反発している。
- 4) 水野 (1991) によれば, トウルニエは1970年代から一貫して移民労働者に共感して作品を書いているという。実際に『聖霊の風』(トウルニエ 1986) では, 移民労働者への共感が述べられている。ただし, 本書の地中海の南と北の文化を二項対立的に見る視点には疑問も残る。
- 5) 2009年9月 Association Relais Habitat 代表フレデリック・トウルヴェへのインタビューによる。
- 6) Pavillon Arsenal 資料室, グット・ドール地区のファイルによる。
- 7) 1996年11月14日の法により, 大都市郊外など, 貧困や失業, 暴力, 学校からのドロップアウトなどの問題が多い地区がZUSに指定され, 集中的な支援及び管理の対象となっている。
- 8) 実際, 郊外に住む移民は地区の食料品店街を *marché* と呼んでいる。(2006年2月のインタビューによる。)
- 9) タチの創設者はチュニジア系移民のジュール・ウアキである。1949年に最初の店を開いた時には50m²であったが, 現在はその100倍以上の広さを占めている (Lallement 2005)。タチはトウルニエ『黄金のしずく』にも登場している。
- 10) 移民労働者向けのフォワイエはアルジェリア経験のある管理人を置いており, 現地の慣習についての知識がある程度共有されていた (荒又 2011)。
- 11) 2012年9月3日イスラム文化協会ユネス・レズキ氏インタビューによる。
- 12) Cf. ニュースウィーク日本版1995年7月19日号
- 13) 2012年9月3日イスラム文化協会ユネス・レズキ氏インタビューによる。

参考文献

- APUR, 2005, *Paris 1954–1999, Données statistiques: population, logement, emploi*, Atelier parisien d'urbanisme
- 荒又美陽, 2009a 「フランスにおける移民の住宅問題—パリ市の現状と課題」『フランスの移民問題の現状及び社会統合政策上の課題に関する調査研究』科学研究費補助金課題番号2080014 (研究代表者宮島喬) 研究成果中間報告書, 15–28
- 荒又美陽 2009b 「都市内部の居住問題にみる政策と移民—パリ, シャトー・ルージュ地区を例として」宮島喬編『移民の社会的統合と排除—フランスの平等を問う』東京大学出版会, 109–124
- 荒又美陽, 2011 「移民労働者フォワイエから社会的住居—パリ周辺のアフリカ系コミュニティと「社会的混合」」『移民の社会的統合と排除—フランスの現状及び課題を中心に』科学研究費補助金課題番号2080014 (研究代表者宮島喬) 研究成果報告書, 67–79
- Associations Coordination Toxicomanies, Salle Saint-Bruno avec la participation de l'association MU-SOJ, novembre 2006, *La vie de quartier à la Goutte d'Or. Perceptions et représentations des habitants*, Salle Saint-Bruno

- Bacqué, Marie-Hélène, 2006, Action collective, institutionnalisation et contre-pouvoir: action associative et communautaire à Paris et à Montréal, *Espaces et sociétés*, 2006/1, no. 123. 69–84
- Bacqué, Marie-Hélène, et Yankel Fijalkow, 2006, En attendant la gentrification: discours et politiques à la Goutte d'Or (1982–2000), *Sociétés contemporaines*, 2006/3, no. 63, 63–83
- Barthélémy, Fabrice, Alessandra Michelangeli et Alain Trannoy, 2007, La rénovation de la Goutte d'Or est-elle un succès? Un diagnostic à l'aide d'indice de prix immobilier, *Economie & Prévision*, 2007/4, no. 180–181, 107–126
- Breitman, Marc et Maurice Culot (dir.), 1988, *La Goutte d'Or: Faubourg de Paris*, Edition Hazan et Archives d'Architecture Moderne
- Cadilhac, Paul-Emile, 1964, Autour de L'Assommoir, In. Cadilhac, Paul-Emile et Robert Coiplet (dir.), *Demeures inspirées et sites romanesques IV*, L'Illustration, 193–200
- Chadych, Danielle et Dominique Leborgne, 1996, *Le Guide du promeneur 18e arrondissement*, Parigramme
- ドンズロ, ジャック, 宇城輝人訳, 2012『都市が壊れるとき—郊外の危機に対応できるのはどのような政治か』人文書院 (= Donzelot, Jacques, 2006, *Quand la ville se défait: Quelle politique face à la crise des banlieues?*, Le Seuil)
- Fijalkow, Yankel, 2007, Construction et usages de la notion de quartier-village: Village de Charonne et Goutte d'Or à Paris, In. Authier, Jean-Yves et al.(dir.), *Le quartier: Enjeux scientifiques, actions politiques et pratiques sociales*, 2007, La Découverte, 75–85
- Hazan, Eric, 2002, *L'Invention de Paris: Il n'y a pas de pas perdus*, Editions du Seuil
- Hourad, Noémie, 2009, *Droit au logement et mixité: Les contradictions du logement social*, L'Harmattan
- INSEE, 2001, *Base de données: Iris...Profils (Paris)*, (Source: Recensement de la population 1999, Exploitations principale et complémentaire), Institut national de la statistique et des études économiques
- INSEE, 2011, Recensement de la population 2008 exploitations principale et complémentaire. Données infra-communales-Population, France-IRIS (<http://www.recensement-2008.insee.fr/basesInfracommunales.action>, 2012年9月10日閲覧)
- Kubo Tomoko, Onozawa Yasuko, Hashimoto Misao, Hishinuma Yusuke and Matsui Keisuke, 2010, Mixed Development in Sustainability of Suburban Neighborhoods: The Case of Narita New Town, *Geographical Review of Japan Series B* 83(1), 47–63
- Lallement, Emmanuelle, 2005, Tati et Barbès: Différence et égalité à tous les étages, *Ethnologie française*, 2005/1, vol. 35, 37–46
- Launay, Lydie, 2010, De Paris à Londres: le défi de la mixité sociale par les “acteurs clés”, *Espaces et sociétés*, 2010/1, no. 140–141, p. 111–126
- 水野尚, 1991「イマージュの試練—ミッシェル・トゥルニエ『黄金のしずく』論」『神戸海星女子学院大学・短期大学研究紀要』no. 30, 205–280
- Office public d'habitation de la Ville de Paris, *Rénovation – Réhabilitation du Quartier de la Goutte*

- d'Or*, Dossier de présentation destiné aux visiteurs de l'Office Goutte d'Or : 33 rue de la Charbonnière Paris 18ème, Janvier 1988
- パンソン, ミシェル, モニク・パンソン=シャルロ, 野田四郎監訳, 2006『パリの万華鏡 多彩な街の履歴書』原書房 (=Pinçon, Michel et Monique Pinçon-Charlot, 2001, *Paris Mosaïque: Promenades urbaines*, Editions Calmann-Lévy)
- Prost, Antoine, 1998, La rue de la Goutte-d'Or et la rue Polonceau entre les deux guerres, *Le mouvement social*, no. 182, janvier-mars 1998, 9-28
- 寺尾仁 2004「フランスにおける都市再生政策の論理の対抗—ソーシャル・ミックスの実現を中心に—」原田純孝・大村謙二郎編『現代都市法の新展開—持続可能な都市発展と住民参加—ドイツ・フランス』(東京大学社会科学研究所研究シリーズ No. 16) 東京大学社会科学研究所 131-146
- Texier, Edmond, 1853, *Tableau de Paris*, Tome I, II, Paulin et le Chevalier (Reprinted Tokyo Athena Press 2010)
- Toubon, Jean-Claude et Khelifa Messamah, 1990a, *Centralité immigrée: le quartier de la Goutte d'Or*, L'Harmattan/C.I.E.M.I., Tome I, II
- Toubon, Jean-Claude et Khelifa Messamah, 1990b, Coexistence et confrontation dans un quartier pluri-ethnique: le cas de la Goutte d'Or. In. *Sociétés contemporaines*, no. 4, décembre 1990, 37-50
- トゥルニエ, ミシェル, 諸田和治訳, 1986『聖霊の風』国文社 (Tournier, Michel, 1977, *Le vent Paraclét*, Editions Gallimard)
- トゥルニエ, ミシェル, 榊原晃三訳, 1996『黄金のしずく』白水社 (Tournier, Michel, 1985, *La Goutte d'Or*, Editions Gallimard)
- Zidi, Claude (réalisateur), 1991, *La Totale!*, 2008, EuropaCorp diffusion (DVD)
- ゾラ, エミール, 黒田憲治訳, 1980『河出世界文学大系36 居酒屋』河出書房新社 (Zola, Emile, 1877, *L'Assommoir*)